

## 多喜二のことなど(一)

杉 山 秀 子

私は最近小林多喜二の記した日記帳，メモ類などを詳細に読む機会にめぐりあわせた。略歴によれば多喜二は秋田県の没落した農家に生まれ，その後一家は小樽に移住し，青年時代は伯父慶秋の援助により小樽商業学校に学び，かたわらパン工場の手伝いをするという。17才で文集『素描』を友人らと創刊し，詩や小品を発表し，18才の秋頃から志賀直哉の文学に傾倒し彼の文学を学び始めている。1924年21才で小樽高商を卒業し，北海道拓殖銀行小樽支店で為替係として勤務するかたわら，この年高商時代の友人達と同人誌『クラルテ』を創刊・主宰し意欲的に創作にとりくむ。しかし多喜二は銀行員としての生活の安穩さにあきたらず，自分達の「生活に対してイージー」なことを反省する。以後発奮して刻苦勉励し，求道者的な習作時代が始まる。ストリンドベリ，アンリ・バルビュス，プーシキン，レールモントフ，ゴーゴリ，ドストエフスキイ，チエホフ，ゴーリキイ，ハーディなどを読みあさり，これらの作家達を文学上の師として仰ぎ，真しでひたむきな創作活動に入っている。

多喜二全集の編纂に生涯をかたむけて心血をそそいだ手塚英孝の回想によれば，多喜二の人となりは一徹で芯からの文学好きで，「庶民的でこだわりのない，愛情の深い，一面子供のように単純でユーモラス」だったと評している。

1926年の秋，折々帳（日記）の中で，多喜二が小樽時代の知人勝見しげる（本各藤橋しげる）から葉山嘉樹の単行本『淫売婦』，続いてリベジンスキイの『一週間』を借りて読んだことが記されている。すでにその年の11月23日には彼は日記の中に『一週間』のあらすじを簡単に書きとめ，コメントまで付し

ていることが明らかにされている。そのコメントによれば、『一週間』の中の「どの人物もはっきりとした個性では描かれていない」こと、女性の登上人物も「概念的にしか出ていないこと、又男達も。」しかし彼らの示した行動というものがどうしても理窟からも饒舌からも行っていないということが言われている。「言葉をかえて言えばインテリゲンツイヤの立場が痛烈に批評されている。」とはっきり述べたうえ、この小説が「日本には生まれない小説である。」とも指摘している。1926年11月27日の日記の中では、ヨハン・ボーヤーの『現代人の悩み』の主人公が個というものの無力を知らなかったために苦しんだとし、「個は衆を発見しなければならない」、「あらゆる解決は衆によるのだ。」という結論に達したといささか性急すぎる程断定し、それが『一週間』等を読み、ことにその信念にうらうちができたとも告白している。この内面的告白が創作の中ではどのように実践化されていったのか、あるいは無意識下に沈潜されたのか、きわめて興味のあることであった。多喜二の創作年譜を繙き、一連の作品群を読みすすむにつれて創作の中に忠実に実践化されていった過程に注目せざるを得ないのである。この間の事情は小樽高商時代の友人島田政策の回想記によっても裏付けられていることが発見された。その回想記の中では「リベジンスキイの『一週間』を、小林はこれは主人公の居ない今迄にない形式で、ロシア革命と反革命の片田舎での物語りで面白いと言った。小林は葉山（嘉樹）の『海に生きる人々』や、この『一週間』に刺激されて『1928年3月15日』や『蟹工船』で主人公のいない作品を書いたのである。」と記されている。この島田政策の述懐や、葉山嘉樹の小説『海に生きる人々』の影響、また小田切進の小林多喜二論等から総合的に類推し得ることは、内容やプロットの設定は『海に生きる人々』にヒントを得、形式は『一週間』に触発されたということがかなり明確な線上に浮きあがってくる。それ故、一般的に多喜二の『蟹工船』を評するに人物描写がいかに粗いということが大方の評価であるが、多喜二自身はむしろ意図的に作品の中で新しい試み——個々の人物の描写に重点をおかず、集団を描き、特定の主人公のいない作品をつくりあげる——を展開させようとしたことが明らかになってくるのである。とはいえ、多喜二のあま

## 多喜二のことなど(一)

りの性急さ故か、全体的ないしは集团的人物の描写はどうも精彩を欠いているという感はぬぐい得ないようである。

多喜二自身は『蟹工船』について1929年次のように述べている。

「A、これは殖民地、未開地における搾取の典型的なものであるということ。

B、東京、大阪などの大工業地を除けば、まだまだ日本の労働者の現状に、その類例が80パーセントにあるということである。

C、さらにいろいろな国際関係、軍事関係、経済関係が透き通るような鮮明さで見うる便宜があったからである。

この作では未組織労働者を取りあつかっている。作者の把握がルンペンに陥ることなく、描き出すことは、未組織労働者の多い日本において、また大学生式「前衛小説」の多いとき、一つの意義がないだろうか。

労働者を未組織にさせておこうと意図しながら、資本主義は、皮肉にも、かえってそれを（自然発生的にも）組織させるということ。

資本主義は未開地、植民地にどんな『無慈悲な』形態をとって侵入し、原始的な『搾取』を続け、官憲と軍隊を『門番』『見張番』『用心棒』にしながら、飽くことのない虐使をし、そして、いかに急激に資本主義化するか、ということ。

プロレタリアは、帝国主義戦争に、絶対反対しなければならない、という。しかし、どういうわけでそうであるのか、わかっている『労働者』は日本のうちに何人いるか。しかし、今これをしらなければならない。緊急なことだ。

中略

帝国軍隊——財閥——国際関係——労働者。この三つが全体的に見られなければならない。それには蟹工船が最もいい舞台だった。」

このあらかじめ意図された帝国軍隊——財閥——国際関係——労働者の構図はきわめて骨太に『蟹工船』の中で描かれることになる。とりわけ当時の財閥——労働者の関係を多喜二は作品の中で次のように具体的に述べている。

「——蟹工船はどれもボロ船だった。労働者が北オホツクの海で死ぬことは、丸ビルにいる重役には、どうでもいいことだった。資本主義がきまりきった所

## 杉 山

だけの利潤では行き詰まり、金利が下がって金がダブついてくると、〈文字どおり〉どんなことでもするし、どんな所へでも、死に物狂いで血路を求め出している。そこへもってきて船一艘でマンマと何十万円が手に入る蟹工船——彼らの夢中になるのは無理がない。」

そして労働者側は自分達の味方であると幻想していた帝国駆逐艦がとどのつまりは資本家側の御用船にすぎぬことを肌で味わわされてしまう。帝国軍隊がいかに財閥の利益と密着しているかが徹底的に究明されており、たゞ単に帝国軍隊内の身分的虐使を描いただけでは人道的怒りをもつことだけにすぎないと多喜二は断言している。肝要なことは、軍隊自身を動かす帝国主義の機構、帝国主義戦争の経済的な根拠を明らかにすべきだと多喜二は主張する。これらの多喜二の言葉の背後には黒島伝治（多喜二と伝治については別稿にゆずる）的な一連の軍隊小説に対するいささかの不満とそれに対する自負がほのみえていると言っても過言ではないであろう。

蛇足になるが、『蟹工船』の外国における翻訳はロシア語訳が9点以上を占め、ついで中国語訳5点、英語訳、ドイツ語訳各2点、チェコ語訳、ヴェトナム語訳が1点ずつとなっている。年代的には1930年4月世界ではじめて上海で潘念之の手によって翻訳されたが、国民党政府に発売禁止にされている。ついで翌年1931年に初のロシア語訳が「世界革命文学」社から刊行された。

## 引用文献

小林多喜二全集 新日本出版社 1983年版